

「多元的現実論の射程

——ロシアのジェイムズ、中国のデューイ」

嘉指信雄

(神戸大学名誉教授、広島市立大学客員研究員)

発表要旨：

アメリカ哲学は、プラグマティズムの系譜に限っても、帰結重視、可謬主義、偶然性や創造性の強調など、家族的類似を示す様々な特徴の織り合わせからなるが、本発表では、とりわけジェイムズやデューイに顕著な多元主義的スタンスに焦点をあて、その現代的な意義を再考してみたい。

ジェイムズは、『プラグマティズム』第四講「一と多」において、「事物を實際上連続させる途は・・・数えきれぬほどある。・・・諸君の宇宙の統一性はそれらの基本的な誘導線によって組み立てられている」と述べ、『根本的経験論』においても、「私たちの宇宙は、現れているままの姿を見ると、広大な混沌である。単一な型の連結が、それを構成しているあらゆる経験を貫いているなどということは決してない。・・・根本的経験論は、・・・統一および断絶の両者に対して公平である」と、その基本的ビジョンを打ち出している。しかし、こうしたジェイムズの多元主義は、何に由来し、いかなる意義・射程を有するのか？

本発表ではまず、ジェイムズ哲学の生成過程における重要な契機となった、父親によるコスモポリタン教育、自然と絵画への情熱（「現象そのものと、現象のなかに現れるものとの差異」、精神的危機の経験（"Sein und Nichts"をめぐる問いと「存在論的驚異症」）などを、発表者のこれまでの論考も踏まえつつ瞥見する。さらに、広く知られるベルクソン、フッサール、西田との関係に加え／と対比して、漱石やジャン・ヴァールなどによるジェイムズ哲学の多様な受容・展開のあり様を概観し、その意義の核心が「開かれた多元性」の重視、「統一」概念の脱構築にあることを確認する。（それは、ロシアにおいてもジェイムズの思想は強い共鳴を呼び起こしながら、中央集権的共産主義の波の高まりとともに後退してしまった軌跡に象徴されており、同様の事態は、革命前後の中国におけるデューイ受容の変遷にも見られる。）

後半では、まず、アメリカ憲法の制定過程で論争の中心となった「合衆国 (United States)」の理念を、「多と一」、「統一」をめぐる問いとして捉え直したうえで、根本的経験論 (radical empiricism) の構想を「ラディカル・デモクラシー」に通ずるものとして位置づけ——シュミットの「政治的なもの」概念などとも対比しつつ——再評価する。さらに、戦争の現実と核の危機が改めて重くのしかかる現在の状況も視野に収めつつ、テクノロジーによる多元的生活世界の変容 (cf. シュッツ「帰郷者」)、とりわけ、核テクノロジーによる「民主的統治の変容と危機」に光を当てることで、「開かれた多元性」のビジョンの意義・射程を再考する。

デューイ哲学についても、その技術哲学、ジェイムズとの違いなどについて、最近の関連論考も踏まえつつ（時間の許す限り）言及してみたいが、今回はジェイムズ哲学の考察を中心とする。